

集団宿泊学習の効果に関する一考察

——香川県五色台教育の分析を中心として——

押 谷 由 夫

(高松短期大学)

1 問題の所在

現在の子どもの教育は、大きな改革のただ中にある。⁽¹⁾ おおまかにそれらを分析すれば、第1に、戦後第3の教育改革といわれる学習指導要領の改訂をはじめとする学校内教育の改善。第2に、青少年教育施設や少年団体活動の促進運動や地域づくりなどを主とした学校外教育の充実。第3に、以上の二つを有機的に結びつけようとする学校教育と学校外教育(社会教育)の提携活動の重視、⁽²⁾ などがあげられる。

要するに、これらは、学校教育と学校外教育が、それぞれの独自性と連帯性を保ちながら、総合的に、子どもの学習意欲を喚起し、創造性豊かで調和的な人間に育てていこうとするのである。

これらの改革の背景には、大きく次の三つの要因が考えられる。

第1は、学校教育から逸脱していく子どもの増加。いわゆる非行児、学校ごらい児、登校拒否児、落ちこぼれ児などの割合が年々増加していることである。これらは、すべて学校教育の影響であるとはいえないが、こういった子どもをつくらないのが学校教育の役割である。そういう意味では、学校教育がその本来の機能を逸脱し、機能不全ないし逆機能の状態に陥っていることになる。⁽³⁾

第2は、急激な社会変動による子どもの教育環境の悪化。戦後の高度経済成長は、人々に物質的豊かさをもたらしたが、逆に子どもの生活環境を大幅に悪化させた。急激な人口移動がもたらす家庭や地域社会の変貌は、昔ならば容易にえられた無意図的教育を喪失させている。⁽⁴⁾

第3は、生涯教育論からの要請。今日の教育改革の理論的支柱は生涯教育論であ

る。生涯教育がさげられる背景には、科学技術の進歩、社会や経済の急速な変化、あらゆる層からの学習要求の増大、経済的・時間的ゆとりの増加、自由な活力ある社会の構築などがあげられる⁽⁶⁾。これらにどう対処していくかは、今日の我々が直面する最大かつ緊急の教育課題だといってよい。そして、現在「一生涯を通して統合された教育」の実現という視点から、教育全体の再編成がなされようとしている。その重要な一翼を担うのが在学青少年の教育である。

このようにみえてくると、先にみた子どもの教育改革は、現実的にも理念的にも、当然起こるべくしておこった現象であるとみなすことができる。

しかし、その効果はまだまだ十分であるとはいえない。非行や学校ざらいは相変らず増加している。地域環境改善のための様々な文化施設が整備されているが、子どもの教育環境の改善に積極的役割をはたすまでにはいっていない。子どもに対する生涯教育の具体的展開もむしろこれからといった感が強い。

このような状況において、子どもの生活圏全体を考慮に入れた幅広い教育改革を考えるには、まず学校教育が学校外教育にどうかかわっていくべきか、を明らかにしておく必要がある。現在の子どもの教育の中心は学校教育であり、いかに学校教育が学校外教育の育成に力を入れるかが、重要な鍵になるからである⁽⁶⁾。

ところで、現在の学校教育において、学校外教育とのかかわりを最も端的に示すのが、校外学習である。その中でも盛んに行われようとしているのが、少年自然の家等を使った集団宿泊学習である。

本格的に少年自然の家が建立され出して10年以上経たない現在、学校教育と連携した集団宿泊学習は年々増え続けている。中央教育審議会答申『生涯教育』などにも積極的利用が唱えられ、今後ますます増えるものと予想される。

しかし、現在行われている「集団宿泊学習」は、はたして先に今日の子どもの教育改革の背景としてのべた諸点の解決に、十分な成果をあげているといえるだろうか。この種のとりくみのうちでは、最も力を入れている試みの一つであり、かつ本格的なとりくみがなされて10年近く経っていることから、今日、早急に解明しなければならない研究課題だといえよう。そのことは、学校教育が学校外教育にいかにかかわっていけばよいのか、の重要な手掛りを与えることにもなる⁽⁷⁾。

2 研究の目的と対象の限定

本研究は、以上の問題意識から、学校と少年自然の家等との協力で行う集団宿泊学習が、どの程度意図された目的を達成しているのかを明らかにし、全体的な子どもの教育改革の流れのなかで、今後の進むべき方向を探ろうとするものである。

ところで、香川県では、昭和46年度に五色台少年自然の家が開所されたのを機に、県下の中学2年生全員参加による集団宿泊学習を開始させた（昭和51年度からは、屋島少年自然の家を使った集団宿泊学習も行われるようになった⁽⁸⁾）。これは、全国的にみて最も早いとりくみの一つである。

さらに、この集団宿泊学習は、五色台少年自然の家を利用するだけでなく、「五色台山の家」と「五色台野外活動センター」それに「香川県自然科学館」等の協力のもとに総合的なとりくみが行われているのが特徴である。五色台全体が自然的・歴史的環境に恵まれているところから、自然観察路、史跡・遺跡めぐりコースなども整備されている。

このように環境的にも施設のにも恵まれた五色台で行われる集団宿泊学習には、具体的に次のような目標がかかげられている⁽⁹⁾。

- ア 自然の恩恵に触れ、自然に親しむ心や敬けんの念を培う。
- イ 自然学習を通して科学的方法を会得し、探究心を高める。
- ウ 集団宿泊学習を通じて、規律、協同、友愛の精神を養う。
- エ 自然や史跡の中で心身を鍛練し、自ら実践し創造する態度を育てる。

これらは、先にあげた子どもの教育改革の線にそったものであり、その背景としてあげた三つの要因を同時に解決しようとする試みでもあることがうかがえる。とくに知的な学習が重視されていることは、単なる集団宿泊ではなく、生涯教育理念のもとに学校教育と学校外教育機関とが連携した独自のとりくみとして注目される。

各学校ではこの精神に基づき、自主的に具体的な方針を立て、3泊4日の活動を計画していく。

このようにみえてくると、「五色台集団宿泊学習」は、とりくみの実績において、内容的豊かさにおいて、また学校や関係機関との連携のしかたにおいて、全国的にもモデル的な集団宿泊学習の一つだとみることができる。

そこで本研究は、この五色台集団宿泊学習を事例としてとりあげ、効果の分析と、今後のとりくみへの課題を探ることにした。その分析視点は、次の四つに集まっている。

第1に、「集団宿泊学習」を終えてどんな感想をもっているか。とくに知的学習に対する反応はどうか。また、学校の授業や小学校でうけた「集団宿泊学習」との比較によって、反応を規定する要因を明らかにする。いわゆる「集団宿泊学習」の満足度調査である。

第2に、とくに「集団宿泊学習」の知的学習に対して、子どもはどうとりくみ、学習の後どう発展させているか。知的学習の事前・事後学習調査により学習の発展度を見る。

第3に、「集団宿泊学習」をうけて、どのような効果を認めているか。それは、先にみた今日の教育課題を十分達成していると考えられるか。またそれらは、どういった要因によって規定されるのか。

第4に、子どもは「集団宿泊学習」の具体的内容に対してどんな意見をもっているのか。

3 調査の方法

調査は、現在の中学3年生に、昨年度（昭和56年度）に行った「集団宿泊学習」についてアンケートを行うという形をとった。中学校の選定は、高松市内の学校で、大規模校と中規模校と小規模校を選び、市街地、郊外、農村部と万遍なく含まれるよう

表1 アンケートの内訳

人、()は%

	男	女	計
A 校	237 (57.7)	174 (42.3)	411
B 校	169 (52.3)	154 (47.7)	323
C 校	145 (52.9)	129 (47.1)	274
D 校	42 (42.0)	58 (58.0)	100
計	593 (53.5)	515 (46.5)	1108

考慮した。各学校とも「集団宿泊学習」を実施して10か月から5か月の間である。

アンケートの対象は、「集団宿泊学習」をうけなかった生徒、及びアンケート当日欠席の生徒以外の3年生全員。しかし、判別困難なもの、明らかに不真面目な回答とわかるもの若干を除いている。その内訳は表1のとおりである。

なお調査方法は、各学校の3年生のクラス担任の先生にお願いし、各クラスごとに全員一括してアンケートに答えてもらうようにした。調査期日は、昭和57年4月19日～24日の1週間である。

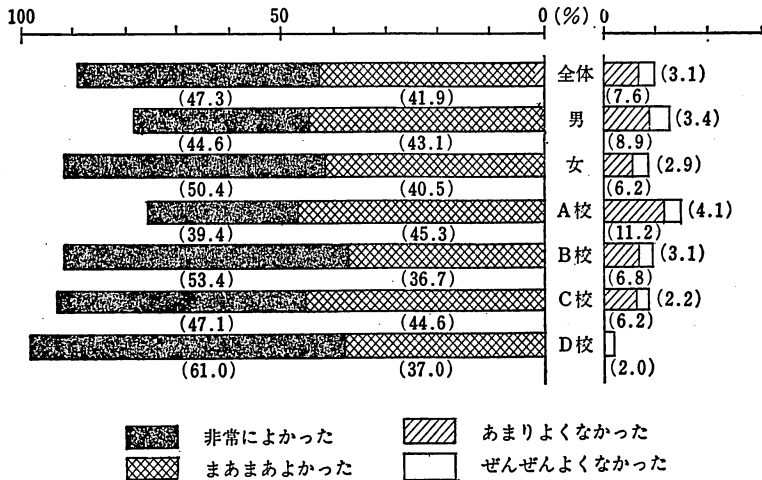
4 結果の考察

さて、結果の考察に移ろう。ここでは、先に示した分析視点にあわせてみていくことにする。

(一) 「集団宿泊学習」後の感想

まず、「集団宿泊学習」をうけた後の感想はどうか。図1は、「終わったあとの全体を通しての感想」を聞いたものである。全体でみると、「非常によかった」が47.3%、「まあまあよかった」が41.9%、あわせて9割近くの者が肯定的反応を示している。

図1 「集団宿泊学習」終了後の感想



これを男女別でみると、男子より女子の方が、学校別でみると、大規模校より小規模校の方が、満足度は高い。

「よかった理由」としてあげているのは次の3つが圧倒的である。第1は、「学校でできないことができたから」(68.5%)、第2は「友だちとなかよく活動できたから」(61.8%)、第3は「自然の中でのびのび活動できたから」(47.8%)である。「集団宿泊学習」がとくに重点としていることがらが、そのままあげられている。この反応をみる限り、当初の目的はかなり達成されている、とみることができる。

なお、よくなかった理由としては、上位から、「のびのび生活できなかったから」(75.8%)、「いろんな活動が十分にできなかったから」(52.5%)、「友だちとうまくいかなかったから」(30.8%)となっており、やはりのびのびと活動できたか、友だちとうまくいったか、が重要な鍵であることがわかる。

香川県では、小学校でも集団宿泊学習の試みがかなりなされている。今回の調査では、小学校の時に集団宿泊学習を受けた生徒が、66.6%いる。彼らにどちらがよかったかを尋ねてみた。66.0%の者が今回と答えている(「小学校の時の方」21.0%、「どちらともいえない」13.0%)。その理由は、「友だちと仲よくやれた」(47.4%)、「自由にできた」(40.7%)、「時間がじっくりとれた」(40.3%)、「内容が高度になった」(35.3%)の四つに要約できる。

逆に「小学校の方がよかった」と答えた者は、その理由として、「自由にできた」

(60.5%), 「友だちとなかよくやれた」 (38.8%), 「あまりきびしくなかった」 (31.6%) をあげている。

「集団宿泊学習」の満足度を左右するのは、先ほどの結果と同様、自由さと友だち関係の重要性を確認させられるが、さらに、時間的なゆとり、知的好奇心の喚起といったことも大切な要因であることがうかがえる。

では、子どもたちは具体的にどんな活動を好んでいるのか。主な活動を人文学習、地学学習、生物学習、野外活動、スポーツ・レクリエーション活動の五つに分けて、それぞれの感想を聞いてみた（各活動体験者のみ）。

断然満足度が高いのは、野外活動である。56.3%が、「非常によかった」と答えており、否定的反応は、約1割。スポーツ・レクリエーション活動は、「非常によかった」が41.2%であるが、「まあまあよかった」をあわせると、同じく9割近くになる。

それにひきかえ、人文学習、地学学習、生物学習の知的学習は、いずれも「非常によかった」が20～25%、「まあまあよかった」が55%前後。満足度は2つに比べてかなり低くなる。しかし、「学校の授業と比べてこれらの学習はどうか」を尋ねると、76%のものが「集団宿泊学習の方がよい」と答えている（「学校の授業の方がよい」としたのはわずかに5%）。その理由として、「より自由さがある」 (60.7%), 「実物がみられる」 (41.7%), 「時間にゆとりがある」 (30%), 「内容が興味深い」 (27.4%) などをあげている。様々な興味ある題材を選び、じっくりと実物にふれて学習することの必要性を示している。その意味では、満足度は、他の活動に比べて低いものの、これからの子どもの教育を考えるうえで貴重な試みであることがわかる。

ただ、理解度において、少しものたりない結果がでている。最も理解度が高い生物学習でも、「よくわかった」が18.8%。もっとも、「だいたいわかった」をあわせると75.3%となり、4人に3人は肯定的に答えてはいる。この結果を各学習後の感想とあわせみると、一定の関係が予測できる。つまり、人文・地学・生物の各学習についての満足度は、その学習の理解度に左右されそうだということである。

これは、単に当日の「集団宿泊学習」のみの成果ではなく、事前学習としていかにとりこんでいるかも影響すると思われる。

（二）「集団宿泊学習」に対する事前と事後のとりくみ

ふつう、生徒は、「集団宿泊学習」の前に、県教育会発行の『五色台のしおり』と、各学校ごとの計画に従って活動の書かれた冊子をうけとる。学校によっては、生徒たちも協力して冊子をつくる。この二つの資料にもとづき事前学習が行われる。

しかし、人文・自然・生物などの知的学習については、全体としてあまりやられて

いない。主に、冊子をもとにほとんど各自が学習するわけだが、一体どの程度事前学習を行っているのか尋ねてみた。

「何もしなかった」と答えた者が、約半数の48.6%。「自分でかなり調べた」(1.1%)、「友だちとかなり調べた」(4.6%)という積極的な者は5.7%にすぎない。あとは、少し事前学習をした程度である(「自分で少し調べた」(28.1%),「友だちと少し調べた」(17.6%))。

さらに事後の学習になると一段と低くなる。「集団宿泊学習がおわたったあと、その内容についてさらに勉強しましたか」の問いに、「何もしなかった」と答えたのが72.5%,「かなりした」はわずか2.1%,「少しした」が25.4%になっている。何らかの事後学習をした者の内、「自分で」が52.7%,「友だちと」が28.1%,「授業で」14.5%,「クラブ活動で」4.7%となっており、学校での学習はきわめて少ないことがわかる。

学校の正規の授業や課外活動において、もっと積極的に事前学習・事後学習を行い、彼らの学習意欲を喚起していく必要があるといえよう。事実、事前学習・事後学習に力を入れている学校ほど、人文・地学・生物学習それぞれにおいて満足度も理解度も高くなっている。

ところで、「集団宿泊学習」後の生徒は、五色台少年自然の家等をどの程度利用しているのだろうか。調査結果では、「利用しようと思わなかったし、利用もしなかった」が56%,「利用したかったができなかった」37%,実に93%の者が利用していないのである。「よく利用した」者はわずか2%,「ときどき利用した」は4%になっている。

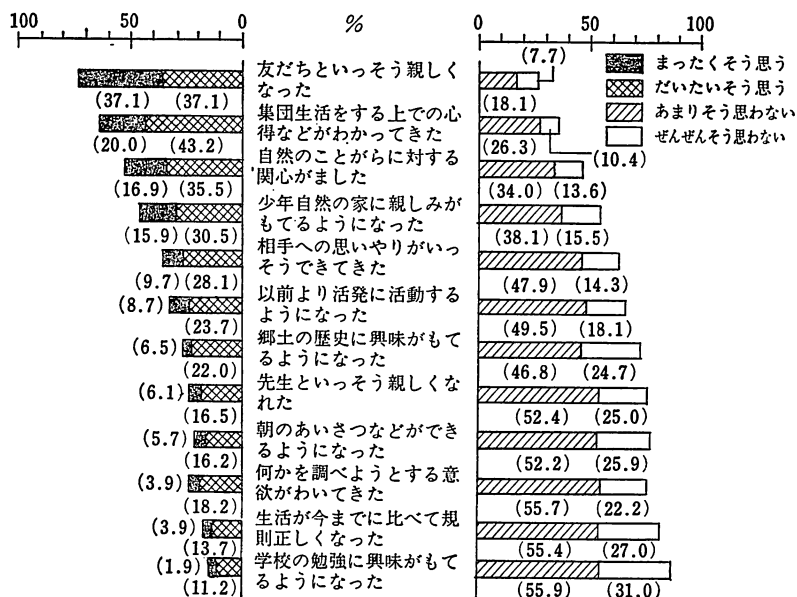
場所が市のはずれにあり、交通の便も不便なことから、ある程度予想される結果ではあるが、もう少し、その後の利用への道をひらいておく必要がある。とくに利用の意志のある者が4割近くいることから、なおさらこの面での考慮が望まれる。

(三) 「集団宿泊学習」の効果

以上にみた、その後の利用という点では、「集団宿泊学習」の効果はあまりなかった。しかし、他の面においてはどうか。五色台での「集団宿泊学習」の効果を様々な面から予測して調査項目をつくり、それぞれにどういった反応を示すか調べてみた。

図2は、その結果を効果の大きかったものから順に並べたものである。最も効果があると答えたのは「友だちと親しくなれた」ことで、「まったくそう思う」が37.1%,「だいたいそう思う」が37.1%,両者をあわせると4人に3人が「効果あり」の反応を示している。肯定的反応が高いのは他に「集団生活をする上での心得などがわかってきた」(「まったくそう思う」20.0%,「だいたいそう思う」43.2%),「自然のこ

図2 「集団宿泊学習」の効果



とがらに対する関心が増した」(同16.9%, 35.5%) などがある。全体的にみて、肯定的反応は少ないが、今あげた上位3項目は、「集団宿泊学習」が力を入れている事柄であるだけに、成果はかなりあったと評価してよい。

これらも含めて上位にランクされている事項をみると、大自然の中で、しかも友だち全員と、同じ場所で3日間共同生活を送った、という体験からくる効果であることがうかがえる。友との親和感、集団生活の心得、自然への関心、少年自然の家への親しみ、相手への思いやり、これらはまさにそういった体験から生まれてくるものである。

しかし、角度を変えて、中学校が行う「集団宿泊学習」という視点から、この効果を見るとどうか。端的にいって、かなりものたりなさを感じる。つまり、今あげた事項は、他の集団が行う「集団宿泊」においても十分えられるであろう効果だからである。生涯教育の一環として、しかも五色台という恵まれた教育環境の中で行う「集団宿泊学習」としては、いささかのものたりない。

「学校の勉強に興味をもてるようになった」は、これらの項目のうち最低で、「まったくそう思う」は1.9%、「だいたいそう思う」は11.2%、積極的評価をした者はあわせて13.1%にすぎない。また「何かを調べようとする意欲がわいてきた」に対し

でも「まったくそう思う」3.9%、「だいたいそう思う」は18.2%となっている。検討を要するところである。

ところで、これらの集団宿泊学習の効果は、どういった要因によって左右されるのだろうか。林の数量化理論第Ⅱ類を使って分析を試みた。効果の各項目を外的基準とし、説明変数を子どもの属性と、意識の二つに分けて、個々に統計処理を行った。なお、各外的基準は、それぞれ「まったくそう思う」と「だいたいそう思う」を一つのグループにし、「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」を一つにあわせて2分類にし、分析している。

結果はどの外的基準に対しても、あまり高い相関比は示さなかった。最高は、「集団生活をするうえでの心得などが身についた」を外的基準とした場合で、0.2047であった。判別の効率はまだ高いことを断ったうえで、この外的基準に関してのみおよそその傾向を示しておこう。

表2は、説明変数を子どもの属性においた場合の結果である。レンジや偏相関係数の大きい変数ほど「集団生活をするうえでの心得がわかってきた」と「そうでない」を区別する力が大きいことを示している。また、ウエイトの符号がプラスであれば、「わかってきた」の方に、マイナスであれば「そうでない」に親和的であるとみなすことができる。

偏相関係数の大きいものをとりあげ、解釈を行うと、次のようになる。つまり、「集団生活をするうえでの心得がわかってきた」と答えるのは、友だちが多くて、学校では活発に活動を行い、実技系の教科の好きな者ほど多い。人づきあいがよく、活動的で、常に何かをしているような子ども像がうかんでくる。

表3は、説明変数を子どもの意識においた場合の結果である。子どもの属性と同様に分析すると、「集団生活をするうえでの心得がわかってきた」とする者は、まず、学校生活を楽しんでいること、しかも学校より家の方が楽しいと感じている。学習塾などなくてもよいと考え、協同より競争の方を生産的だと感じ、人のいうことを素直に聞き、友だちは信用できると考えている人。また、家のしつけや学校の規則をきびしいと感じている人、ということになる。

つまり、人との信頼関係、相互依存関係を重視し、学校生活も家での生活も楽しんでいるが、一方では、学校の規則や家庭のしつけにきびしさを感じたり、競争の意義をみい出したりしている生徒ほど、効果をあげているのである。

この二つをあわせてみると、この面に関して効果をあげるには、常日頃から、人間関係に気をつけさせ、活動的で、生活を十分楽しませると同時に、きびしさをどこかで体験させておくことが必要となる。「集団宿泊学習」によって、外からのきびしさが自己へのきびしさに結びつくとき、集団生活の心得が会得できるのであろう。

表2 数量化理論第Ⅱ類による「集団宿泊学習」の効果の分析(その1)

要 因	カ テ ゴ リ	ノーマライズド・ カテゴリ・スコア	レ ン ジ	偏相関係数
友 だ ち 数	多い方	2.070	15.659	0.158
	ふつう	0.874		
	少ない方	-13.589		
1番すぎな教科	理科系	- 0.308	7.683	0.127
	文科系	- 4.756		
	実技系	2.928		
学校での活発度	活発な方	4.173	9.796	0.119
	ふつう	- 0.718		
	活発でない方	- 5.623		
性 別	男	- 1.543	3.335	0.066
	女	1.792		
文化施設利用度	利用する	- 2.391	4.174	0.062
	あまり利用しない	1.783		
	ほとんど利用しない	0.137		
ク ラ ブ 活 動	運動部	0.986	2.411	0.044
	文化部	- 1.021		
	入ってない	- 1.425		
成 績	よい方	0.910	1.243	0.017
	ふつう	- 0.333		
	わるい方	0.083		
学 習 塾・家庭 教 師 の 日 数	な し	0.020	0.605	0.008
	1 日	0.166		
	2 日	- 0.242		
	3日以上	0.362		
兄 弟 数	な し	0.186	0.314	0.004
	1 人	0.033		
	2 人	- 0.129		
	3人以上	0.020		

表3 数量化理論第Ⅱ類による「集団宿泊学習」の効果の分析(その2)

要 因	カ テ ゴ リ	ノーマライズド・ カテゴリ・スコア	レ ン ジ	偏相関係数
学 校 生 活	楽しい	6.049	33.169	0.313
	楽しくない	-27.121		
協 力 と 競 争	競争の方がいいものができる	4.105	9.829	0.121
	協力の方がいいものができる	- 5.724		
学 習 塾	あった方がよい	- 6.416	9.848	0.112
	なくてよい	3.432		
反 発	したくなる	- 3.428	8.569	0.107
	したくならない	5.142		
学 校 と 家 庭	学校の方がよい	1.599	11.946	0.098
	家庭の方がよい	-10.348		
家 の し つ け	きびしすぎる	1.630	7.973	0.083
	きびしくはない	- 6.343		
学 校 の 規 則	きびしすぎる	5.193	6.421	0.066
	きびしくはない	- 1.228		
友だちへの信頼 度	信用できない	- 3.222	5.131	0.066
	信用できる	1.909		
考えること、動 かすこと	身体を動かす方がすぎ	- 2.347	3.911	0.050
	考える方がすぎ	1.565		
授 業 の 程 度	むつかしすぎる	1.204	4.356	0.048
	むつかしくない	- 3.151		
今 の 苦 し み	必ずむくわれる	1.845	3.679	0.047
	むくわれるとは思わない	- 1.834		
友 だ ち	一人の方がいい	1.926	2.278	0.021
	友だちという方がいい	- 0.352		
勉 強	やってみるとおもしろい	1.859	2.187	0.019
	やってもおもしろくない	- 0.328		
家 と 友 だ ち	友だちと遊ぶ方が楽しい	0.185	0.306	0.004
	家にいる方が楽しい	- 0.121		

(四) 「集団宿泊学習」に対する意見

さて、以上は「集団宿泊学習」の反応及び効果をみたものである。最後に、個々の内容に関する意見をまとめておく。

今までの分析からほぼ推測されるが、「このような集団宿泊学習はもっとたくさんあればいいか」という質問に、約85%の者が「はい」と答えている。しかし、その内容に関しては、不満がないわけではない。

図3 「集団宿泊学習」に関する意見

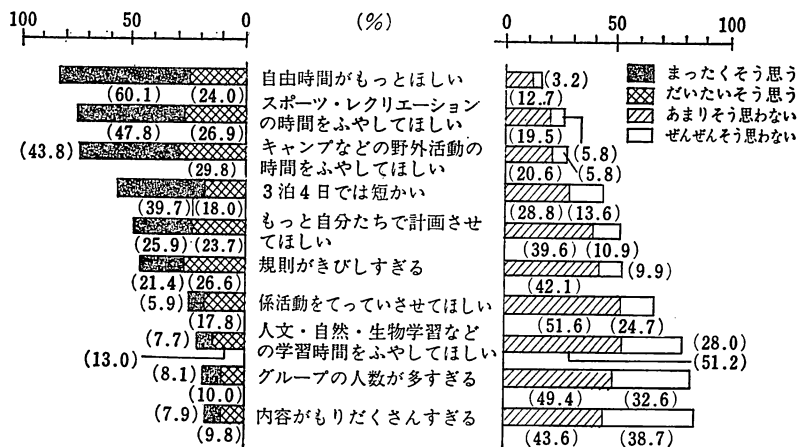


図3は、「集団宿泊学習」に関する意見を10項目にまとめて、それぞれにどう思うか聞いた結果である。肯定の意見が多い順に並べてある。子どもの最も望んでいるのは自由時間。「まったくそう思う」が60.1%ととびぬけて高い。次は「スポーツ・レクリエーションの時間をふやしてほしい」と「キャンプなどの野外活動の時間をふやしてほしい」が同じくらいに高い欲求度を示している。さらに「3泊4日では短い」と思っている者が6割近くもいる。これらをもとに生徒側の要望をまとめると、もう少し時間をとって、自由に思い存分スポーツ活動や野外活動を五色台の自然の中で行いたい、ということになる。

「今後1番したい活動は何か」と尋ねた時も、野外活動が48%、スポーツ・レクリエーション活動が35%、生物学習7%、地学学習6%、人文学習4%（以上の五つの活動の中から選択させた）となっており、野外活動やスポーツ・レクリエーション活動に対する要求の強さを示している。

ただ問題は、人文・地学・生物学習などの学習活動である。「もっとふやしてほしい

い」という意見は、「まったくそう思う」「だいたいそう思う」をあわせて21.7%。「今後1番したい活動」でも、それぞれ5%前後と、欲求度は低い。全体的な活動の中にこの知的学習をどうもりこんでいくか。また、どのような形で学習させていくか。今後の重要な課題だといえよう。

なお、その他の面では、「もっと自分達で計画させてほしい」としたのは、肯定的反応と否定的反応がほぼ半々。「規則がきびしすぎる」という質問では、わずかながら否定的反応の方が多い。この種の質問に対する答えとしては、かなり肯定的と解釈してよい。

しかし、この二つの面は、「集団宿泊学習」の成果を左右する重要な役割をはたす。事実、学習後の満足度とはかなりの相関を示していた。さらに、より多く、子どもたちが計画にかかわれないか、規則がきびしいと感じないようにできないか、常に工夫する必要がある。係活動、グループ編成、内容の量などについては、あまり不満の意見はでていない。

5 まとめと今後の課題

以上、五色台での「集団宿泊学習」体験者のアンケートをもとに、反応や効果の実態を明らかにしてきた。最初の問題意識、「はたして、現在行われている集団宿泊学習は、今日の子どもの教育課題を解決する上で十分な効果をあげているだろうか」に対する解答は、ほぼ明らかになった。それらをまとめながら、今後の検討事項をあわせ記すことにする。

「集団宿泊学習」を全体を通してみた場合、かなり成功したとつくみだとみなすことができる。冒頭に今日の子どもの教育改革の背景としてあげた三つの点、それぞれについてみると、以下のようにまとめられる。

まず、学校教育の機能不全に対するかわりに関して。子どもたちにとって「集団宿泊学習」は、学校教育のマンネリ化や、学習の片寄りを打破する上でかなり効果をあげている。学校とは違った、時間的ゆとりのある、自由な雰囲気の中で、様々な活動や、実物による内容豊かな学習を行うことによって、全人格的なふれあいを体験し、集団生活の大切さや集団活動のたのしさを味わっている。そのことは、学校教育の最大の機能不全である学校から逸脱していく子どもを救うことに、かなりの効果を示すと思われる。学校の究極の目的である、全人的で社会的な人間を育成する上で、この「集団宿泊学習」は、大きな役割をはたす可能性があることを調査結果は示している。

第2の失われた教育環境をとりもどすことに関してはどうか。この面での「集団宿

泊学習」の効果は、二つの面から分析できる。一つは、「集団宿泊学習」時にうけた効果、一つは、その後の利用効果（自分の教育環境の一部になっているか）、である。前者に関しては、大きな効果を指摘できる。自然の中でののびのびとした活動によって、自然への関心もめばえているし、少年自然の家への愛着もできている。しかし、後者のその後の利用効果においては、十分とはいえない。終了後に利用した人はきわめて少ない。前者の効果が大きいだけにくやまれる。

第3の生涯教育理念の実現については、かなり検討の余地を残している。学校教育において、生涯教育理念を実現させるには、次の二つを絶対条件とする。一つは、生涯にわたって継続する学習意欲を育て、自ら考え、楽しみを見いだす人間を育成すること。一つは、学校教育と社会教育とが連携し、相互に協力しあいながら、上記の人間の育成を図ること、である。

「集団宿泊学習」の場合、前者については、知的学習以外での活動意欲は大いに喚起しているが、知的学習に関する意欲はあまり喚起されていない点を指摘できる。しかし、学校でのそれよりははるかに効果をあげている。後者については、制度的には、かなり連携がなされており、高く評価できるが、その前後を含めて評価すると、問題点がでてくる。「集団宿泊学習」前後に、当日の学習内容を補充するという意図が、あまりみうけられない。そのことが、先にあげた学習意欲の喚起に結びつかない要因の1つになっているといえよう。

友だちといっしょに楽しむことは必要だが、そのみでは発展しない。楽しみながらともに高めあうという側面が欠如している時、学校の行う「集団宿泊学習」はその本来の意味を失う。その意味でも、今後生涯教育理念の実現という観点からのみなおしが必要である。

さて、次に、以上の点をふまえて今後「集団宿泊学習」をどう進めていけばよいのか。考慮すべき主な点をまとめておく。

第1は、学校と少年自然の家等との連携の強化である。「集団宿泊学習」に対する事前学習・事後学習に対する学校側の協力はもちろんのこと、クラブ活動や他の様々な学習機会での連携を日頃から考えておき、子どもに常に五色台を意識させるようにしておく必要がある。

第2は、知的学習の再検討。知的学習は、設備や指導員とも関係してくるので、教師との連携を深めることが第1である。せっかく学校を離れて自然の中で生活するわけだから、学校の学習をわざわざもち出す必要はない。場所の特性を生かして、学習意欲を喚起する思いきったとりくみを考えてよい。しかし、学校での十分な事前・事後学習は、必要である。生涯にわたってもち続けられる学習意欲をもたせることを、知的学習の課題とし、この観点から様々な試みがなされなければならない。

第3は、「集団宿泊学習」に対する子どもの参画。今あげた知的学習を効果的にするには、何よりも子どもたち自身が計画段階から参画することが必要である。グループで何を調べたいか、などをあらかじめ決めて学習させると、主体的な活動になりやすい。また他の活動についても、教師と子どもとの連携、子どもと指導員との連携を重点に、子どもの参画を計ることが望まれる。この考えの基本は、子どもたち自身に学習意欲、活動意欲をもたせることにある。

第4は、ゆとりある充実した日程。事情が許せば、あと1日延長させるとよい（以前は4泊5日）。野外活動、スポーツ・レクリエーション活動は、子どもが最も楽しみになっているものであり、知的学習の充実とあわせて、これらを充実させるには、あと1日は必要である。時間的ゆとりやのびやかさを保つ上でも検討されてよい。

第5は、日常の生活指導。「集団宿泊学習」の効果をあげるには、日常の生活指導が大切である。とくに友だち関係を親密にさせる工夫、学校生活を楽しませる工夫が不可欠なことをアンケート結果は示している。

おわりに

今回の研究は、子どもの教育改革に対するとりくみの1つとして、「集団宿泊学習」をとりあげ、分析を試みたものである。今日ではさらに「ゆとりの時間」等を利用して、様々なとりくみがなされている。しかし、それらも基本的には、今回の分析に使用した子どもの教育改革の背景である三つの要因の解決を第1に考える必要がある。とくに生涯教育の実現という課題に対し、どうとりくんでいるかは重要な分析視点となる。本研究は、そのための基本的な考え方を提示したことになる。

今回の研究をさらに発展させながら、生涯教育の実現のために、学校教育は学校教育（社会教育）にどうとりくめばいいのかを、総合的に探っていく予定である。

〔注〕

- (1) ここでいう子どもとは、主に小学・中学校段階の子どもをさしている。
- (2) 永井道雄『これからの教育を考える』国土社、1978、pp.182～4、林部一二『学校教育と社会教育』明治図書、1976等、及び拙稿「子どもの学習コミュニティづくりへの一視点——全体的枠組みと四国四市の比較——」（高松短期大学研究紀要 第12号 1982、pp.35～46）参照のこと。
- (3) このことについては、拙稿「教育的浪費」（新堀通也編『教育病理の分析と処方箋』教育開発研究所、1977、pp.51～80）及び、新堀通也『現代日本の教育病理』ぎょうせい、1976参照。

- (4) 藤本浩之輔『子どもの遊び空間』日本放送出版協会, 1974, 野垣義行編『現代の子ども』第一法現, 1977等参照。
- (6) とくに, 文部省『生涯教育<中央教育審議会答申>』大蔵省印刷局, 1981参照。
- (8) すでに, 高松市が全部の小学5年生と中学1年生に行う「市民文化センター学習」について分析している(拙稿「子どもの文化施設利用学習の可能性に関する一考察」日本教育社会学会編『教育社会学研究』(第34集)東洋館出版, 1979, pp. 114~125)。
- (7) 少年自然の家を使った集団宿泊学習の理念等については, 林部一二, 前掲書, 湯上二郎・坂本昇一編『学校と地域の青少年指導』教育開発研究所, 1978, 野口博通編『青少年教育の実践』全日本社会教育連合会, 1978, 宮本一「生涯教育の観点からみた少年自然の家の在り方」(日本生涯教育学会編『生涯教育体系の構想』1981, pp. 303~25)などに, また批判的意見については, 大橋謙策「少年自然の家の現状と問題点」(『月刊社会教育』(No217)国土社, 1975, pp. 80~3), 永井憲一編『学校教育と社会教育の結合』勁草書房, 1979などにのべられているが, 本格的な実証的研究は, あまりなされていない。日本余暇文化振興会『学校外教育活動の実践事例の調査研究』1979は, かなり広範囲にわたって調査しているが, 実施調査に重きをおいており, 子どもの反応調査は行っていない。各少年自然の家や学校等で個別にアンケートを行っているのがほとんどである。
- (8) 香川県発行『五色台の自然と友だちと』p. 1
- (9) 同上書, p. 14
- (10) 新堀通也『社会教育の方向』ぎょうせい, 1970, 林部一二, 前掲書, 文部省, 前掲書等を参照。
- (11) この面に関しては, 片岡徳雄編『個を生かす集団づくり』黎明書房, 1976, 片岡徳雄『学級集団の経営』ぎょうせい, 1979が参考になる。
- (12) この面に関しては, 宮本一氏の前掲論文が大いに参考になる。
なお, 香川県の集団宿泊学習検討委員会が, 1980年度に『集団宿泊学習活動の改善及び施設設備の整備について』の報告書を出している。今後一層の充実をめざして改善が検討されていることを付け加えておく。

※ 本研究のデータ処理はすべて広島大学計算センターのHITAC M-180によった。なお, プログラムはSPSSとPPSSを使用。広島大学大学教育センターの山崎博敏助手の協力を得たことを感謝します。

※※ アンケート実施において, 対象校の校長先生はじめ3年生担任の先生方に大へんなご協力を頂いた。あわせて感謝します。